

# 鄧石如の篆刻における奏刀への試論

An essay on Deng Shiru's seal carving style through new materials

兼任研究員 遠藤 昌弘

Masahiro Endo

## 目次

0. 前言
1. 篆刻における奏刀について
2. 篆刻における印面について
3. 鄧石如の印譜について
4. 新出の鄧石如の篆刻資料について
5. 鄧石如篆刻作品における印材写真・印面写真資料の整理
6. 鄧石如の篆刻における奏刀への試論
7. 奏刀法からみた、鄧石如における篆刻芸術への検証
8. 鄧石如の篆刻における印面拡大図版と専家の見解の検証
9. 結語

## 0. 前言

鄧石如（1743-1805）は、清朝の乾隆中期より嘉慶初期に活躍した。篆刻家であり、のちに書家として大成した。現在までに画作の存在は一点も確認されておらず、印と書のみを精力を傾注したといえる。出身は文士の家系とされるが、祖代に科擧合格者はなく、鄧石如の交流も鄧石如本人と直接に関係を持った人物に限られる。不撓不屈ともいえる強靱な鄧石如の精神性は、そのまま印と書に反映されている。印は近代篆刻の開祖として、また書は金石書法の具現者として、とくに印・篆書・隸書作品には最高の評価が与えられている。のちに鄧の金石書法を継承した、呉熙載（1799-1870）・趙之謙（1829-1884）・呉昌碩（1844-

1927)などに強い影響を与えた。

筆者(遠藤)はこれまでに鄧石如研究を行い、十件を発表した<sup>①</sup>。本稿では、鄧石如の篆刻を接写によって印面を拡大写真にした新出の資料によって、以下の項目について検討を加えたものである。第一章、篆刻における奏刀について―では、奏刀とはどういう行為であるかを確認する。第二章、篆刻における印面について―では、印面が物語る重要性を確認する。第三章、鄧石如の印譜について―では、鄧石如印譜の概要を述べ、定本資料を確認する。第四章、新出の鄧石如の篆刻資料について―では、新出資料の掲載書籍を列挙する。第五章、鄧石如篆刻作品における印材写真・印面写真資料の整理―では、新出資料を列挙し、その内容について整理する。第六章、鄧石如の篆刻における奏刀への試論―では、掲出した印面拡大写真から、鄧石如の奏刀法について検討を試みる。第七章、奏刀法からみた、鄧石如における篆刻芸術への検証―では、前章で述べた鄧石如の篆刻における奏刀法の特徴をまとめ、専門家による鄧石如の篆刻への理解をとおして検討する。第八章、鄧石如の篆刻における印面拡大図版と専門家の見解の検証―では、専門家の論考と本稿の研究成果を校合する。

本研究は、大東文化大学書道研究所における兼任研究員(平成二十四年)研究計画「鄧石如研究―その芸術の意義」(平成二十三

年九月・研究計画書提出/平成二十四年四月・承認済)における個別研究の一項目である。本来であれば小稿は、昨年(平成二十五)三月に発表予定であったが、筆者(遠藤)の不測の体調不良のため未提出となり、本年度の提出となった。

① (1) 鄧石如(有紀年) 作品目録(『大東書道研究』第七号所収 1999 大東文化大学書道研究所)。(2) 鄧石如隸書冊頁『詩経』大雅抑篇について(『駒沢女子大学研究紀要』第六号所収 1999 駒沢女子大学)。(3) 鄧石如揮毫品における款印と使用時期の変遷について(『大東書道研究』第八号所収 2000 大東文化大学書道研究所)。(4) 鄧石如行書『詩稿冊』について(『大東書道研究』第一〇号所収 2002 同前)。(5) 鄧石如詩二首を読む―その推敲の変遷と文学について―(『大東書道研究』第一二号所収 2004 同前)。(6) 鄧石如研究資料文献目録(『大東書道研究』第一四号所収 2006 同前)。(7) 鄧石如年譜詳考(『大東書道研究』第一五号所収 2007 同前)。(8) 新資料 鄧石如尺牘「陳寄鶴書」二種について(『大東書道研究』第一六号所収 2008 同前)。(9) 新資料 包世臣に宛てた鄧石如尺牘について(『大東書道研究』第一七号所収 2009 同前)。(10) 鄧石如の篆刻における先人の影響(『大東書道研究』第一九号所収 2011 同前)。

## 1. 篆刻における奏刀について

北川博邦氏は、篆刻における奏刀について、『缶翁印痕』扶桑印社（2001）の識語において

……古来篆刻三法と称して、字法、章法、刀法の三を挙げている。字法とは文字学のことであるなどと、一知半解のことをいう人もあるが、今それはどうでもよい。この三法の中、刀法を以てもっとも伝え難い者としている。それは字法、章法は理によつて説明することができるが、刀法は技であり功であり、自得に俟つかないからである。……

と述べている。印譜は、たしかに印影をみて、その文字の様子を確認することができるが、印面の、つまり印刀の跡を知ることにはできない。印面は、刻者の印刀の用い方を知るための唯一の残された証拠である。

## 2. 篆刻における印面について

十年ほど前に、遠藤玄遠氏の編集した『缶翁印痕』という、呉昌碩の印面の拡大接写画像四十七枚を原色にて収録した、従来にない非常に興味深い書籍が刊行された。名人の印譜ですら実押本を求めることは困難であるし、たとえ販売品であっても高額なものである。

ましてや実際の印そのものとなると、希少であることはもちろんだが価格を想像することすら困難である。時価、または売り手側の言い値ということになる。たいへんなことである。遠藤氏の企画はすばらしいが、これを実現させたことは、遠藤氏の強い意志という言葉だけでは言い尽せない労作に敬意を表するものである。

遠藤氏は『缶翁印痕』の末尾に、「古人への反論―刀法を伝えるに法あり」と題して

……篆刻ではいつ頃からであろうか「刀法は伝え難し」と言われてきた。十数年前より呉昌碩や趙之謙の刻印をファインダーを通して覗くことを始めた。これがおもしろい。陰影では穏やかに見える印も、ファインダーの中では刀法本来の姿をより誇張し厳しく激しい動きを現わしている。少々印面が磨滅しようと底に残る印痕は刻した当時と些かも変わっていない。しかも代作も贋作も容易に分別を可能にしてくれる。拡大した写真では肉眼では見えない刀意や刃毀れまで生き生きと再現され、これが呉昌碩なのだという大いなる感動を得た……

と述べて、その印面の伝える内容を具体的に指摘している。

## 3. 鄧石如の印譜について

鄧石如の実押印譜は、道光二十六年（1846）陳以和によって、

わずかに印面十七方を載せた『完白山人篆刻偶存』が最初のものである。鄧石如の子息である鄧伝密（1795-1870）<sup>①</sup>の跋文があり、時歳在柔兆敦臧初冬、不詳鄧伝密敬識於無竟之寓<sup>②</sup>で結ばれている。柔兆敦臧は丙午（道光二十六年）にあたり、ときに鄧伝密五十二歳のものである。『完白山人篆刻偶存』は、鄧石如の子息が鑑賞していることから、すべて鄧石如の真印と認められる唯一の定本である。当時より珍本であり稀覯本であるが、幸いにも我が国の河井荃廬（1871-1945）が入手したものが『書苑』に部分連載され、昭和十七年（1942）に一冊にまとめられて三省堂より複印された。この他に、実押印譜としては葛昌楹『鄧印存真』（印面二十五方所載 1944）や葛昌楹『完白山民刻印』（印面十五方所載 編譜年不詳）がある。なお、小稿中に付した印譜の印面所載数は、印譜によって多寡があるものがあり確定しない。鄧石如の名声がひろく喧伝されるようになると、鄧石如印譜への要望は一気に増大したようで、摸刻による印譜が編まれ王爾度『古梅閣仿完白山人印贖』<sup>③</sup>（印面七十六方所載 第一次本1872・第二次本1875）や張咀英『魯盦仿完白山人印譜』西泠印社（印面百二十五方所収 1945）がある。また、実押風に凸版の印面をおこして印泥で押し、実押印譜に擬した『完白山人印譜』西泠印社（1916）や『鄧石如印存』有正

書局（印面九十六方所収 1915頃）がある。

印刷によるものは刊行の年代順に、鄧以蟄『鄧石如法書選集』文物出版社（印面七十三方所収 1969）・『鄧石如印譜』香港博雅齋（1978）・『鄧石如印存』台湾学界出版（1979）・『鄧石如印譜』武漢古籍書店（1990）・孫慰祖『鄧石如篆刻』上海書店出版社（2001）・高惠敏・王冰『鄧石如印譜』中国書店（2007）・王義驊『鄧石如篆集粹』吉林文史出版社（2011）・陳永静『中国篆刻芸術精賞 鄧石如』海峡出版發行集團・福建美術出版社（2012）などがある。

なお、鄧石如の初期の印譜については、「鄧石如的幾種印譜及其自刻印」銭君匉・葉潞淵<sup>④</sup>『芸林叢録』第九編 商務印書館香港分室・『芸文叢輯』第五輯所収 1973）に詳しい。

今日に至るまで、鄧石如の印譜集として新しく刊行されるが、その内容は初期の印譜を総合したものと概ね同じ内容で、いくらか新発見の印というものが加えられるものの疑問が残るものが多い。鄧石如の若年の書作や刻印の様子は、葛昌楹『鄧印存真』に載せられた子息鄧伝密の跋文に詳しい。紙面に痛みがあるためか部分的に文字の見えないところがあるが、その書作と刻印の様子について述べられたところを以下に記す。

……父（鄧石如）は祖父（鄧石如の父のこと 鄧一枝）の葬儀

を終えたのち各地に旅をした。旅すれば必ず金石の文字を訪ね、また賢者に教えを受けた。雨風にあたって、いにしえを思い精神を高揚させた。心にしたがって書をなし、胸中の鬱勃を表

現した。数日してまた遊び、疲れては書をなすことは変わらな  
いことだった。このため父の書は流伝して今も残されて見る  
ことができる。刻印は、ただ壮年の頃に手がけただけであった。  
刻印の依頼は一日でこなさなければならず、依頼者を選ぶこと

はできずに与えていた。印を手に入れた人も、気にかげずにい  
て大切にできなかったので、今残っているものは千のうち一つも  
ないであろう。(原文中国語・遠藤訳 『東園還印図』序稿)……

これを読むと、鄧石如の壮年期の姿が眼前に見るように書かれて  
いて、書の伝存が多いのに対して、印は多作であったにも関わらず  
印材の伝来がきわめて少なかったことがわかる。文中の「其存於今、  
千無一焉」には、驚くばかりである。

跋文の末尾には「時歳在丙午除夕前一日、不詳男伝密敬書」とあ  
り、『完白山人篆刻偶存』の鄧伝密の跋文と同じ年紀が書かれ、道  
光二十六年、鄧伝密五十二歳のものである。「除夕」とあることか  
ら十二月末日であり、その一日前に書かれた。『完白山人篆刻偶存』  
の跋文には「初冬」とあることから、その三か月後である。また『完  
白山人篆刻偶存』の跋文の文字は厳格な楷書でかかれ二つの押印も

あるが、この跋文は細字の行書で、また印もない。また鄧伝密によ  
る再跋には「此稿草」と初跋をよんでいることから、草稿がその  
まま載せられたようである。

鄧石如の篆刻研究で非常に困難なことは、作品が確定しないこと  
で、これは自押による自作印譜がないためである。一冊でも自押に  
よる自作印譜があれば、それだけで検証の基準となる標準作品が確  
定して、比較検討することができることになる。

信頼できる印譜は『完白山人篆刻偶存』の印面十七方だけで、そ  
のほかは出自の不明な印ばかり」というのが鄧石如における印の実  
相である。近代篆刻史上の不滅の金字塔ともいべき『中国篆刻叢  
刊』(二玄社) 全六十巻を編集した、印学研究の第一人者でもあり、  
実作者としての篆刻家でもあった小林斗盦氏をもってして、その第  
二十二巻「鄧石如」の解説において

……有正本の『鄧石如印存』は、比較的早期の刊本に拠ったが、  
元来凸版押しのみどい印譜である。編集も粗雑で、朱白を逆に  
したものが多いので、前半の三十七頁に未録の印を選出して  
ないものが多いので、前半の三十七頁に未録の印を選出して  
十一頁に収めた。更に『鄧石如法書選集』に載る、従来未見の  
資料九頁を加えて本編とした。後者には側款もなく年代の推定  
も不能、その上両譜とも拓影不精のものが多く、これを前半の

中へ挿入するのを憚られたので、排列に不備不満が残り、更に存疑印の混入等、現時点では止むを得なかったようだ……

と述べている。鄧石如の印というものの確定ができず、存疑印との弁別も困難していることでも、鄧石如の篆刻において標準となるべき印が定まらず揺らいでいることを理解できよう。

こうした標準となるべき印が定まらず揺らいでいることから、ありがちなことではあるが鄧石如の新発見の印というものが、すこしずつ加わり、何の検討もなままに、鄧石如の印として次々と転載されているものが出てくる。名人に代作はつきものだが、まったくの偽物がまかり通ることはできる限り阻止しなければならぬ。この点について本稿では第七章で、わずかに一印ではあるが朱文印「本來面目」について検討を試みる。

（補説―鄧石如が用いた印刀について）小林斗盦氏は、鄧石如が用いた印刀について、

……写真④のC（図11）の細い鉄筆は、小印や細密な作品のときに使います。鄧石如・呉熙載・趙之謙・徐三庚など鄧派の名人は、大体この様な比較的細い刀を使ったようです（『初学篆刻入門』日本放送協会学園）……

と述べている。非常に珍しい図版であり、ほかにこうした指摘はない。文中に挙げられた鄧派の印人たちは、数多く繊細な印を刻して

いる。写真Cの印刀と呉昌碩の印刀（写真A）を比べてみると刃の厚みは二倍以上あることがわかる。呉昌碩の印に見る線の古樸さは、用いた印刀の影響も大きい。写真B（徐星州用刀）はさらに刃の厚みをまして刃の角度も鈍角（図10）となっている。

①初名は尚璽。字を守之、号は少白。篆隸・篆刻を善くした。

②正編には『完白山人篆刻偶存』の印面十七方を載せ、続編には印面六十一方を載せている。

③「印と印人『藝林叢録』選訳I」二玄社（1982）に、佐野栄輝氏の邦訳による「鄧石如の数種の印譜とその自刻印」が収録されている。

④『初学篆刻入門』には原寸写真を載せているが、小稿ではミリ寸法を添付して縮小図版にした。

#### 4. 新出の鄧石如の篆刻資料について

新出の鄧石如の篆刻資料とは、新しい印が発見されたという意味ではなく、従来から代表作とされてきた印影の印材が写真によって紹介され、さらにその印面が接写によって拡大写真となって掲載されたものが刊行されたことである。以下に、その書目を挙げる。

・孫慰祖『鄧石如篆刻』上海書店出版社（2001）

・陳永静『中国篆刻芸術精賞 鄧石如』海峡出版發行集團・福建美

術出版社（2012）

また書と篆刻を収録した鄧石如の作品集にも、印面の接写や拡大写真を載せたものがある。

・王家新『鄧石如書法篆刻全集』天津人民美術出版社（2005）

・洪亮『鄧石如』中国書店（2012）

以上の図版は、すべて新しく撮影したのではなく、その印刷内容を比較してみると、先行の出版書籍からの転載と新資料の追加によって編集されたものも見受けられる。

これ以前に、わが国における刊行された書籍にも、一部が掲載されたものがある。以下に、その書目を挙げる。

・『鄧石如逝世百八十年・包世臣逝世百三十年記念展図録』謙慎書道会（1985）

・小林斗盞『初学篆刻入門』日本放送協会学園（1990）

・『日中書法の伝承』謙慎書道会（2008）

## 5. 鄧石如篆刻作品における印材写真・印面写真資料の整理

以上の書籍に掲載された篆刻作品を、以下に列举して、その目録とし、掲載の内容を精査する。

文中の略称「謙・鄧」は、『鄧石如逝世百八十年・包世臣逝世

百三十年記念展図録』謙慎書道会（1985）。「小林」は、小林斗

盞『初学篆刻入門』日本放送協会学園（1990）。「孫」は、孫慰祖『鄧石如篆刻』上海書店出版社（2001）。「王」は、王家

新『鄧石如書法篆刻全集』天津人民美術出版社（2005）。「謙・

日」は、『日中書法の伝承』謙慎書道会（2008）。「陳」は、陳永

静『中国篆刻芸術精賞 鄧石如』海峡出版発行集団・福建美術出版社（2012・1）。「洪」は、洪亮『鄧石如』中国書店（2012・3）のこと。

印影は、すべてを掲載出来ないことから、小稿を読む方が最も閲覧しやすいであろう『中国篆刻叢刊』第二二卷「鄧石如」二玄社（1984）の掲載頁を付記した。『中国篆刻叢刊』に掲載のないものは、掲載書籍を注記した。

\*

朱文印「被明月兮佩寶璐駕青虬兮驂白螭」

作品情報…寸法77mm×38mm。款識「癸卯、九月。鄧琰」、別に「長卿」の款識がある。乾隆四十八年癸卯（1783）四十一歳、九月。摸刻、呉迥の印。出典、『楚辭』九章・涉江。所蔵、個人（日本）。掲載資料…『中国篆刻叢刊』第二二卷二九頁。参考、長卿（何震のこと）が刻した印面を磨去して、鄧石如が再刻したものと考えられる。何震は著名な篆刻家であるが、何震の真印はたいへん珍しいものである。このことから本件

の印面が磨去されていることは、何震の刻とした偽印であった可能性が高いと言える。また、印面を磨去したのは鄧石如自身か、すでに磨去されたものに刻したのかは不明である。<sup>①</sup>

謙・鄧…石材写真（款識「癸卯、九月。鄧琰」「長卿」、不鮮明）・印面原寸写真（不明瞭）

#### 朱文印「家在環峰漕水」

作品情報・款識「己亥、十一月。古澆鄧琰」。寸法…34mm×22mm。語句出典、不詳。乾隆四十四年己亥（1779）三十七歳、十一月。掲載資料…方去疾『明清篆刻流派印譜』上海書畫出版社（1980）が最初に載せたもので、これ以前の印譜には見えないものである。『中国篆刻叢刊』第二二巻は、載せていない。

孫…石材写真（鮮明）・印面拡大写真（鮮明）

王…撮影角度や印面の陰影から、孫の転載と思われる。

洪…石材写真・印面拡大写真。撮影角度や印面の陰影から、孫の転載と思われる。

#### 朱文印「江流有聲斷岸千尺」

作品情報・款識「一頑石耳。癸卯菊月。客。寓樓無事。秋多淑懷。乃命童子、置火具。安斯石於江鐘。頃之取出。幻如赤壁之圖。恍若見蘇髯先生、泛

於蒼茫烟水間。噫。化工之巧也如斯夫。蘭泉居士、吾友也。節赤壁賦八字。篆於石、贈之。鄧琰、又記。圖之石壁如此云。寸法53mm×34mm。被刻者、畢夢熊。出典、蘇軾「後赤壁賦」。乾隆四十八年癸卯（1783）四十一歳、九月。現藏、西泠印社。掲載資料…『中国篆刻叢刊』第二二巻二五頁。孫…石材写真（側款三面中の二面、不鮮明）・印面拡大写真（不鮮明）

王…石材写真（石材頭部及び側款三面中の二面、鮮明）・印面拡大写真（鮮明）

陳…印面拡大写真（不鮮明）、印面の陰影から、孫の転載と思われる。洪…石材写真・印面拡大写真。撮影角度や印面の陰影から、王の転載と思われる。石材頭部及び側部四面中の四面（鮮明）が載せられているが、側款三面中の第一面・第二面の款識はやや不明瞭ながら見えるが、第三面の款識は見えない。また第四面には、西泠印社の蔵品整理番号と思われる「1297」の白紙が貼られている。

#### 白文印「淫讀古文甘聞異言」

作品情報・款識「王充論衡語。辛丑、五月。古澆子、鄧琰」。寸法31mm×32mm。出典、王充『論衡』自紀篇。乾隆四十六年辛丑（1781）三十九歳、五月。現藏、上海博物館。掲載資料…『中国篆刻叢刊』第二二巻一三頁。

孫…石材写真（側款一面、鮮明）・印面拡大写真（鮮明）

王…石材写真・印面拡大写真。撮影角度や印面の陰影から、孫の転



載と思われる。

陳…印面拡大写真。撮影角度や印面の陰影から、孫の転載と思われる。

洪…石材写真・印面拡大写真。撮影角度や印面の陰影から、孫の転載と思われる。

### 白文印「雷輪」(五面印の1)

作品情報…寸法22mm×22mm。被刻者不詳、刻年不詳。現蔵、西泠印社。

掲載資料…『中国篆刻叢刊』第二二卷一七頁。

孫…石材写真(印材部分二面を写し、台座に入っている)

王…印面拡大写真(鮮明)

洪…印面原寸写真、撮影角度や印面の陰影から、王の転載と思われる。

### 白文印「子輿」(五面印の2)

作品情報…寸法22mm×22mm。被刻者不詳、刻年不詳。現蔵、西泠印社。

掲載資料…『中国篆刻叢刊』第二二卷一七頁。

王…印面拡大写真(鮮明)

陳…印面拡大写真(やや不明瞭)

洪…印面原寸写真、撮影角度や印面の陰影から、王の転載と思われる。

### 朱文印「古歡」(五面印の3)

作品情報…寸法67mm×22mm。被刻者不詳、刻年不詳。現蔵、西泠印社。

掲載資料…『中国篆刻叢刊』第二二卷一七頁。

王…印面拡大写真(鮮明)

陳…印面拡大写真(鮮明)

洪…印面拡大写真・印面原寸写真、撮影角度や印面の陰影から、王の転載と思われる。

### 朱文印「燕翼堂」(五面印の4)

作品情報…寸法67mm×22mm。被刻者不詳、刻年不詳。現蔵、西泠印社。

掲載資料…『中国篆刻叢刊』第二二卷一七頁。

孫…石材写真(印材部分二面を写し、台座に入っている)

王…印面拡大写真(鮮明)

陳…印面拡大写真(鮮明)

洪…印面原寸写真、撮影角度や印面の陰影から、王の転載と思われる。

### 朱文印「守素軒」(五面印の5)

作品情報…寸法67mm×22mm。被刻者不詳、刻年不詳。包世臣印跋「此完

白山人中年所刻印也。山人嘗言。刻印、白文用漢。朱文必用宋。然僕見東坡・海嶽・瀕波印章多已。何曾有如是之渾厚超脫者乎。蓋縮繹山三墳而爲之。

以成其奇縱於不覺。識者當珍如秦權漢布也。包世臣記」。現蔵、西泠印社。

掲載資料：『中国篆刻叢刊』第二二卷一七頁。

王：印面拡大写真（鮮明）

洪：印面原寸写真、撮影角度や印面の陰影から、王の転載と思われる。印材にある包世臣印跋の原寸写真（鮮明）は、洪だけが載せている。

朱文印「十分紅處便成灰」

作品情報：款識「琰」。寸法33mm×26mm。出典不詳、刻年不詳。現蔵、西泠印社。掲載資料：『中国篆刻叢刊』第二二卷二二頁。

孫：石材写真（款識「琰」は見えない、不鮮明）、印面拡大写真（不鮮明）

王：石材写真（款識「琰」、鮮明）・印面拡大写真（鮮明）

陳：印面拡大写真。撮影角度や印面の陰影から、孫の転載と思われる。

洪：石材写真・印面拡大写真。撮影角度や印面の陰影から、王の転載と思われる。

白文印「宦鄴尚娶萊石兄弟書籍」

作品情報：鄧石如款識「古浣」。寸法27mm×27mm。被刻者、尚娶・尚萊石。

刻年不詳。掲載資料：『中国篆刻叢刊』第二二卷二二頁。

孫：石材写真（款識「古浣」、鮮明）

朱文印「闕里孔氏零谷攷藏金石書畫之記」

作品情報：款識「戊申、初冬。邗上寓廬。皖人鄧琰、作篆」。乾隆五十三年戊申（1788）四十六歳、十月。寸法38mm×24mm。被刻者、孔零谷。掲載資料：『中国篆刻叢刊』第二二卷五七頁。孔零谷（生卒不詳）について、名は、繼杆。孔子の末裔とされる。官は、太守。画梅をよくする。羅聘（1733-1799）・桂馥（1736-1805）・呉錫麒（1746-1818）と莫逆の交をした。

孫：石材写真（款識「戊申、初冬。邗上寓廬。皖人鄧琰、作篆」は見えない、不鮮明）

王：撮影角度や印面の陰影から、孫の転載と思われる。

朱文印「一日之跡」

作品情報：寸法27mm×27mm。摸刻、梁表の印。刻年不詳。現蔵、上海博物館。掲載資料：『中国篆刻叢刊』第二二卷一三頁。孫慰祖『鄧石如篆刻』上海書店出版社（2001）によって、始めて側款に「古浣子、鄧琰」が刻してあることが判明した。

孫：石材写真（款識「古浣子、鄧琰」、鮮明）、印面拡大写真（鮮明）

王：石材写真・印面拡大写真。撮影角度や印面の陰影から、孫の転載と思われる。

洪：石材写真・印面拡大写真。撮影角度や印面の陰影から、孫の転

載と思われる。

### 白文印「膠城一日長」

作品情報・款識「古流」。寸法33mm×26mm。出典不詳、刻年不詳。掲載資料・『中国篆刻叢刊』第二卷一九頁。

孫・石材写真（款識「古流」、判読できる程度）、印面拡大写真（不鮮明）

王・石材写真・印面拡大写真。撮影角度や印面の陰影から、孫の転載と思われる。

陳・印面拡大写真。印面の陰影から、孫の転載と思われる。

洪・石材写真・印面拡大写真。撮影角度や印面の陰影から、孫の転載と思われる。

### 白文印「在心爲志」

作品情報・款識「在心爲志。鄧石如篆、時客邗江」。寸法49mm×51mm。出典、『詩經』毛氏序の語、刻年不詳。掲載資料・孫慰祖『鄧石如篆刻』上海書店出版社（2001）。『中国篆刻叢刊』第二卷には、載せていない。

孫・竹根材写真（款識「在心爲志。鄧石如篆、時客邗江」、鮮明）、印面拡大写真（鮮明）

陳・印面拡大写真。撮影角度や印面の陰影から、孫の転載と思われる。

### （両面印）朱文印「家在四靈山水間」・白文印「鑲硯山房圖書」

作品情報・寸法27mm×27mm。刻年不詳。現蔵、北京故宮博物院。注記、王家新『鄧石如書法篆刻全集』天津人民美術出版社（2005）によって、はじめて両面印であることが判明した。掲載資料・『中国篆刻叢刊』第二卷三九頁。

第二卷三九頁。

王・石材写真（款識「鑲硯山房。守之記」、鮮明）・印面拡大写真（鮮明）  
洪・石材写真・印面拡大写真。撮影角度や印面の陰影から、王の転載と思われる。

### 朱文印「有周秦漢魏晉唐間意」

作品情報・寸法・20mm×20mm。款識「鄧琰篆。庚子、五月」。乾隆四十五年庚子（1780）三十八歳、五月。現蔵、首都博物館。掲載資料・『鄧石如書法篆刻全集・下卷』天津人民美術出版社（2005）にはじめて側款を載せている。『中国篆刻叢刊』第二卷には、載せていない。

王・石材写真（款識「鄧琰篆。庚子、五月」、鮮明）・印面拡大写真（不鮮明）

洪・石材写真・印面拡大写真。撮影角度や印面の陰影から、王の転載と思われる。

## 白文印「海陽東野」

作品情報…寸法37mm×18mm。款識「海陽東墅。石如」。被刻者不詳、刻年不詳。参考、徐三庚印跋「徐三庚、襄海。曾觀於滬上」。吳隱印跋「完白山人刻海陽東墅印。藏合肥龔景張先生文房。曩嘗出示。徐襄海先生歎賞精絕。勒款於後。壬寅夏五月。山陰吳隱石潛甫觀於印金樓中」。掲載資料…『中国篆刻叢刊』第二二卷九頁。

王…石材写真(款識「海陽東墅。石如」・徐三庚印跋、鮮明。吳隱印跋、不鮮明)

## 朱文印「本來面目」

作品情報…寸法…36mm×35mm。款識「甚矣哉。人之面目不可忽也。吾與萬物群生於天地之間、其萬有不齊邪。其有至齊者存焉。張目以視之、不可得而見也。傾耳以聽之、不可得而聞也。一而二、二而三、三而四、四而五、五而十、十之十爲百、百之十爲千、千之十爲萬、其紀之不可勝紀邪。其推之而不能自己邪。清者、寧者、動者、植者、其爲物不同也、而莫非物也、一物一聲也、一物一色也。一物之聲、聲各聲也。一物之色、色各色也。是知植物有聲有色、動物有面有目、皆出自本來耳。善善惡惡、吾末如之何。吾甚願人有面目。不可□泊五常之性曰仁義禮智信、不可去七發之情曰喜怒哀懼憂惡欲。夫然後人人皆尊我之面目而不敢輕忽也、夫然後人人皆知我之面目出自本來也、又何暇計及它之面目得人喜、我之面目得人憎耶。

是不可須臾忘其本來耳。故志之、妄作自嘲云。余偕同里劉海峰公之曾孫小航君來白下勾留匝月、適迎江寺僧乞余書楹聯十四字、以石章報我、三生有幸、亦大可證翰墨前緣也。乙丑、花朝日。鄧完白氏。嘉慶十年乙丑(1805)六十三歲、二月十五日。出典不詳。掲載資料…『鄧石如書法篆刻全集・下卷』天津人民美術出版社(2005)。『中国篆刻叢刊』第二二卷には、載せていない。

王…石材写真(款識四面のうち第一面は鮮明、第二面は側面からの撮影のため不明瞭)・印面拡大写真(鮮明)

洪…石材写真・印面拡大写真。撮影角度や印面の陰影から、王の転載と思われる。

## 白文印「見大則心泰禮興則民壽」

作品情報…寸法29mm×28mm。款識「見大則心泰。禮興則民壽。鄧琰、爲袁梅甫先生、篆於石。時寓京口之江深艸閣」。被刻者、袁恭。出典不詳、刻年不詳。所藏、個人(日本)。掲載資料…『中国篆刻叢刊』第二二卷二三頁。参考、鄧石如款識にある「江深艸閣は、嘉慶二年丁巳(1797)五十五歳、七月十五日。蘇州(江蘇省)の江深草閣にて、四体書冊頁(十二紙)、篆書(三紙)「怪石長松贈……」。款識「完白山人」・隸書(三紙)「少學琴書偶……」。款識「石如書」・楷書(三紙)「雪齋清境發……」。款識「丁巳、新秋。書於江深艸閣。完白山人」・草書(三紙)「擇故山濱水……」。款識

「嘉慶二年、秋七月望日。完白山人、鄧石如。書於京江深草閣」にある。楷書・草書の款識にも『江深艸閣』が記されている。

謙・日・石材写真（款識二面のうち第一面は鮮明、第二面は側面からの撮影のため不明瞭）

小林・印面拡大写真（あまり判然としない）

陳・印面拡大写真（やや不明瞭）

### 白文印「我書意造本無法」

作品情報・寸法35mm×28mm。款識「戊申、初冬。詠亭先生屬。古浣子琰」。

乾隆五十三年戊申（1788）四十六歳、十月。被刻者、葉天賜。出

典、蘇軾「石蒼舒醉墨堂詩」。掲載資料・『中国篆刻叢刊』第二二卷四九

頁。葉天賜（生卒不詳）について、字は孔章、号は詠亭・誰莊。もと安

徽省歙縣の人、のちに江都（江蘇省揚州）に移籍する（『廣陵詩事』『揚

州畫舫録』）。関連、『我書意造本無法』印は、包世臣の草書六屏「嘗有好

事……（道光甲午仲春月 1834）」に押印。また包世臣作品（行書

文語立幅「而東晉士人……」・行書立幅『嬌舞倚床便面』若廼頰覆玉……）

に押印。このことから、何らかの経緯をへて包世臣の所蔵となったもの

と考えられる。

陳・印面拡大写真（鮮明）。

### 白文印「藤華山下晚風秋」

作品情報・寸法30mm×29mm。款識「藤華山下晚風秋。己亥秋石如筆」。乾

隆四十四年己亥（1779）秋、三十七歳。現蔵、鋤月廬。参考、洪亮

『鄧石如』中国書店（2012）だけが載せていて、他の印譜に見ないも

のである。

洪・石材写真（款識「藤華山下晚風秋。己亥秋石如筆」、鮮明）

### 朱文印「靜養」

作品情報・寸法28mm×15mm。款識「性静情逸心動神瘦。石如筆」。現蔵、

鋤月廬。参考、洪亮『鄧石如』中国書店（2012）だけが載せていて、

他の印譜に見ないものである。

洪・石材写真（款識「性静情逸心動神瘦。石如筆」、鮮明）

### 朱文印「得于心」

作品情報・寸法17mm×7mm。款識「凡画皆重意。感于心、应于手、意到

便成此。難与外人道也。乾隆庚子夏。古浣、鄧琰篆」。乾隆四十五年己亥

（1780）夏、三十八歳。現蔵、鋤月廬。参考、洪亮『鄧石如』中国書

店（2012）だけが載せていて、他の印譜に見ないものである。

洪・石材写真（款識二面のうち一面のみ、不明瞭）

\*

以上、十九方の印材写真を確認し、印面写真は十八面となった。

鄧石如の現存印について、小林斗盦氏は『中国篆刻史』筑波大学芸術専門学群（1993）において、わが国には「二個」と明言している。また孫慰祖は『鄧石如篆刻』上海書店出版（2001）において、「三十件左右」と述べている。こうしてみると篆刻の専門家をもってしても、現存の印は非常に少ないことが理解できる。今回の調査において二十印を確認したが、最後の三印は従来印譜に見ないもので、これを除いた十七印のなかにおいても、朱文印「家在環峰漕水」・朱文印「有周秦漢魏晉唐間意」・竹根材の白文印「在心爲志」・朱文印「本來面目」は従来印譜に見ないものである。さらにこの四印を除いて、印譜に掲載されて今日まで伝来したものは僅かに十三印である。

①何震について、明の人。字は、主臣・長卿・雪漁。婺源（江西省婺源）の人。篆刻に精通していた（『明畫錄』『印人傳』『廣印人傳』）。呉迥について、明の人。字は、亦歩。歙縣（安徽省）の人。「曉采居印譜」がある（『廣印人傳』）。

## 6. 鄧石如の篆刻における奏刀への試論

書籍の掲載図版は原色印刷になっているが、小稿図版では白黒印

刷になるため、図版から説明できることを条件として取り上げた。

この図版から鄧石如の篆刻における奏刀への検討を、以下に試みる。

図1、朱文印「古歡」（五面印の3）は、印面における底面処理を印刀の刃先で丁寧な平面に整えている（第1点）。これは、近年の呉昌碩などの底面処理が印刀を突き立てるようにして刀の跡を残して凸凹状になるのとは異なるものである。また、師と仰いだ包世臣を通じて鄧石如を学んだ呉熙載は、鄧石如と同様に底面処理をしている印（白文「呉熙載」・朱文「攘之」・朱文「師慎軒」・朱文「足吾所好翫而老焉」四面印<sup>①</sup>）が存在する。この印は、「師慎軒」印の底面を平面に処理したところに「呉讓之」の署名を刻しており、底面が平面でなければ出来ないことである。

（補説—印章彫鈕の名工の言葉）彫工師は原石を減らすことを嫌い、原石の形状にしたがって彫工を加えることを最上という。例を挙げれば、印材の頭部が平面であるものを平頭という。印材に彫工された獅子などの立体鈕は、それだけで芸術品ともいえるほど見事なものであるが、台湾の印章彫鈕で現代の名工として知られる廖徳良氏によると、平頭の印材に彫工を凝らす平頭彫が、その技量の見せどころである。いかに印材を減らさず、彫工を与えることができるのが上等な職人である」と言う。また硯の彫工師も、同様であるという。鄧石如の場合、師系を持たないことから、その系譜をたど

ることはできない。伝記によれば、父の鄧一枝から篆刻の教えを受けたとされている。

また「古歡」の歡にある佳の縦画（図版の白点箇所）にみる線の表情に違いがある。これは横画（図版の白点箇所）も同様である。縦画は線の右側が比較的段差なく、またキレイに滞りなく刻しているのに対して、線の左側は、断続して線が刻され、いわゆるギザ状になっている。また横画は線の下辺がキレイに刻してあるが、上辺はギザ状になっている。これは鄧石如の奏刀（印刀を運ぶこと、運刀ともいう）が、押刀（おしとう、突き刀・衝刀ともいう）と引刀（ひきとう）の二種をもちいて刻していること（第2点 図9）を示している。

押刀は印刀が刻者自身から上に押し上げるようにしていくやり方で、印刀が比較的垂直に近く、また印刀を自在に運びやすいことが特徴である。これに対して引刀は印刀が刻者自身にむかって上から引き下げるようにしていくやり方で、印刀が比較的右に傾斜し、また印刀が安定しないことから自在には運びにくいことが特徴である。くわえて印刀の握り方であるが、筆と同様に印刀に対して指ひとつをかける単鉤法と、指ふたつをかける双鉤法があり、さらに四指をかける四指斉頭法がある。また五指すべて握る握刀法がある。以上の奏刀についての説明は、明瞭にして要訣を得た松丸東魚氏の説

「印の刻法」二玄社『書道講座』第六卷所収）にしたがって述べた。中国では、用刀十三法<sup>②</sup>が篆刻の書籍に述べられるが、ここでは紹介するに留める。

握刀法は刀の跡が深く刻され、また線にもカケやワレなどが出るため、大印に適している。七分寸または八分寸程度の大きさに二文字ないし四字程度であれば、単鉤法または双鉤法であろう。鄧石如の場合も、単鉤法または双鉤法によるものと推察される。松丸氏は、白文（押印した時に、文字が白になる）と朱文（押印した時に、文字が朱になる）の解説をして、押刀のみによる奏刀法を紹介している（図8）。これは松丸氏が文中にも書いている通り、私自身の方法を伝えるので、決してこれではなければならぬというのではない。とあることから、読者が理解しやすいよう、また篆刻に親しめるように述べているのであろうと推量されるのであるが、鄧石如の朱文印においては、上から下へ線が引かれる場合は、右辺は押刀（図の実線矢印）にし、左辺は引刀（図の点線矢印）にしている。また右から左へ線が引かれる場合は、下辺は押刀にし、上辺は引刀にしている。これは篆書の運筆と同様に、奏刀も行っていると考えられる（第3点。歡の口（図版の右側の口のところ）のUのところ）が左から右に刀の切れ跡（○印部分）があるのも、口の篆書体の運筆に従ったものである。以上のことは、図1の印面の拡大画像にあわせて印

影を参考として掲載した。印面と対照するために、画像処理で反転させて、印面と印影を同じようにして、比較検討できるようにした。印影では漠然とした印象が、印面の画像と合わせてみることで、より明確に線の処理を理解することができる。

図2、白文印「子興」(五面印の2)の波線の箇所も、運筆に従ったために曲線が刀を当てながら進めたためギザ状になっている。印影で見ると限りはキレイな曲線であるが、印面からははつきりとギザ状の刀痕を確認できる。

図3、朱文印「一日之跡」は、白色斜線の箇所が、引刀のところである。白色斜線の箇所は、印刀あたりの角度が斜めになっていることで判断できる。日のところは黒色斜線の箇所が先に刻されていて、つぎに白色斜線の箇所が刻されている。印刀の刃先が深くはいつて線にあたったことからカケが生じている。また、朱文印「古歡」(図1)において指摘した(第1点)と同様で、印面における底面処理を印刀の刃先で平面に整えているが、朱文印「古歡」(図1)に比べて、その整え方はやや粗雑である。

図4、白文印「鑲硯山房圖書」(両面印 対面に朱文印「家在四靈山水間」がある)は、黒色斜線の箇所が、引刀のところである。鑲・硯・房ともに、黒色斜線の箇所が、印刀あたりの角度が斜めになっていることで判断できる。また篆書の運筆に従い、右から左へ運ぶ

ところの下辺が引刀になっていることも、他の印と同様である。山の縦画は、とくに引刀になっていることがわかる。また図版の右の▲印のところの右辺は、はつきりと引刀によって、しだいに手元に引きながら筆が進められるように上から下に印刀が運ばれているのが確認できる。

図5、朱文印「十分紅處便成灰」は、篆刻でよく述べられる。白文印は線を太くして満白(印面に朱の部分が少なくなる)の表現が望ましく、朱文は線を細くして、押印時に印泥によって線が太くならないようにすることが望ましい。とは異なる表現である。つまり朱文でありながら、線が太く残されて、筆で書いた、そのままを印に写しこんだようである。このような朱文印でありながら筆画を太くする印は、ほかにも鄧石如には例があつて、自用印としてよく使われた朱文印「家在龍山鳳水」(『中国篆刻叢刊』第二二卷六七頁)や朱文印「念宛齋」(同一二頁)・朱文印「桃江漁者」(同一二頁)がある。朱文印「十分紅處便成灰」は、すべて曲線で構成される印面と七文字の篆書体が絶妙に布字されていて、十分分は組み込ませることで一体をなしている。便の父のところの白色の曲線の箇所は、その三つの横画の曲線の調和の見事さと、奏刀の途中で刀を入れなおすことなく一刀で進めていること(第四点)には驚かされる。また十の横画の起筆部分は隸書の逆筆藏鋒のようにして、横画の中



央をもちあげて湾曲している。とくに注意したいのは辺郭の処理で、長方形の印材であるにもかかわらず、上辺の郭線を文字にしたがつて曲線を作り出していることである。また印面右の辺郭も中央をかなりくくの字にしている。このような辺郭の処理へのこだわりは、鄧石如における印文と辺郭が印面を構成するうえで非常に意識された技法である（第五点）。また、朱文印「古歡」（図1）や朱文印「一日之跡」（図3）において指摘した（第1点）と同様に、印面における底面処理を印刀の刃先で平面に整えているが朱文印「古歡」（図1）に比べて、その整え方はやや粗雑である。

図6、朱文印「江流有聲斷岸千尺」は、図6の朱文印「十分紅處便成灰」において（第四点）として指摘した内容と同様で、図版に加えた有の白色曲線の箇所が、その六つの横画の曲線の調和の見事さと、奏刀の途中で刀を入れなおすことなく一刀で進めていることは、図5印と同様で滞りのない奏刀である。また、朱文印「古歡」（図1）・朱文印「一日之跡」（図3）・朱文印「十分紅處便成灰」（図6）において指摘した（第1点）と同様に、印面における底面処理を印刀の刃先で平面に整えているが、朱文印「古歡」（図1）に比べて、その整え方はやや粗雑である。

図7、朱文印「本來面目」は、これ以前の出版物にみないことから、『鄧石如書法篆刻全集』天津人民美術出版社（2005）にお

いて初めて紹介されたものと思われる。その下巻に篆刻の一章があり、その最末尾の三六四頁に印影と印材の周囲四面にわたる側款拓影が載せられている。また、同書三三二頁には原色で、印材第四面と印面拡大の写真が載せられている。図7に白色点線を加筆した部分を見ると明らかに、線の上辺と下辺にギザ状を見ることができるとくに面と目にある横画は顕著である。これは図1から図6までみた鄧石如の印の線にはないもので明らかに奏刀法が異なるものである。また、印の底面の処理も印刀の刃先で平面に整えたものではなく凸凹状になっている。さらに周囲四面にわたる側款（図版省略）は行書を主にして草書を交えたものであるが、筆画に見る生硬さは一目瞭然である。くわえて側款の末尾の文章に、余偕同里劉海峰公之曾孫小航君來白下勾留匝月、適迎江寺僧乞余書楹聯十四字、以石章報我、三生有幸、亦大可證翰墨前緣也。乙丑、花朝日。鄧完白氏（わたし鄧石如は、同郷の劉海峰公の曾孫である小航君とともに白下よりやってきて滞在することひと月あまりになる。迎江寺にいくと、僧侶がわたしに書の楹聯十四字を依頼してきた。そのお礼にと、わたしに印材を下された。これは前世・現世・來世の三生の幸である。これも劉海峰公との翰墨の前縁の大きいなる証といふべきものであろう）とあり、年紀の乙丑は嘉慶十年乙丑（1805）鄧

石如六十三歳の二月十五日にあたる。しかしこの日、雷陽（安徽省

望江県)の署齋の小停雲館において、篆書六屏(拓本)程頤『非禮勿言箴』「伊川先生非……」(款識「嘉慶歲次乙丑、華朝。書于雷陽署齋之小停雲館中。完白山人、鄧石如。」)を揮毫している作品(真跡は確認できず、拓本による)がある。鄧石如は、この日、つまり二月十五日は雷陽(安徽省望江県)に滞在していたわけである。長江にしたがい北北東にむかって迎江寺のある安慶までは直線距離で七〇キロほど離れていて、鄧石如の所在の点からも内容に矛盾がある。以上の検討から、朱文印「本來面目」は鄧石如によるものと確定する要素は、全くないと考えてよい。

①二玄社『中国篆刻叢刊』第三三卷(1983)四七頁所載。

②用刀十三法について解説したものに、北川博邦氏が邦訳した斐師白「刀法を語る」(印と印人『藝林叢録』選訳I 二玄社 所収)がある。

## 7. 奏刀法からみた、鄧石如における篆刻芸術への検証

第六章で述べた鄧石如の篆刻における奏刀法の特徴について前段でまとめ、後段において専家による鄧石如の篆刻への理解をおしえて検討する。

鄧石如の篆刻における奏刀法の特徴―特徴第一点、印面における

底面処理を印刀の刃先で平面に整えている。とくに朱文印においては刀を衝きいれて凸凹状の処理をしない場合を多見する。

特徴第二点、押刀と引刀の二種をもちいて刻していること。

特徴第三点、篆書の運筆と同様に、奏刀も行っていること。

特徴第四点、朱文印において、奏刀の途中で刀を入れなおすことなく一刀で進めている場合が見られる。

特徴第五点、朱文印において、印文と辺郭が印面を構成するうえで非常に意識された処理法をとっているものがある。白文印においても文字を辺郭にかけて文字を大きく見せる白文印「見大則心泰禮興則民壽」などの例もあって朱文印に限定したことはないのだが、朱文印の場合とはとくによく理解できる。

鄧石如の篆刻への理解―はじめに、直接に鄧石如を指導した程瑤田(1725-1814)の評語を引用する。

……鄧石如は、小篆を得意として、すでに李陽冰の域に達している。篆刻は、何震や蘇宣を範として学んでいる。わたくし(程瑤田)が見るかぎり、こうした人物はめつたにいない。その作品は、ときに元人の作品と見間違ふほどである。その剛健と婀娜による篆刻表現は鄧石如だけの得意の表現である。秦篆や漢隸は、まだ十分ではない。しかしながら学ぶことは年を重ねて十分なので、すぐに習得することであろう(原文中国語・遠藤

訳 翟云升にあてた書簡の語) ……。

乾隆四十六年(1781)、程瑤田五十七歳の評語である。鄧石如、三十六歳のことであった。この年、鄧石如には篆書立幅『周易』(上経・謙)がある。書風はまだ玉箸篆(玉筋篆ともいう)であり、後年の鄧石如の得意とした小篆様にはなっていない。前年の乾隆四十五年(1780)の印に、梅鏐のために刻した朱文印「半千閣・朱文印「清素堂」などがある。これもまた、玉箸篆を基調とした印風である。剛健婀娜とは、男性的な力強さと、女性的なしなやかさで、これをあわせ持った意である。蘇軾(1036-1101)の詩(「次韻子由論書」『蘇東坡詩集』三卷 所収)に「端莊雜流麗、剛健含婀娜(端莊は流麗をまじえ、剛健は婀娜をふくむ)」の語がある、また清末の曾國藩(1811-1872)には「書」というものは、剛健と婀娜の二つが必要であり、どちらかも欠くことはできない(原文中国語・遠藤訳『曾文正公日記』)という文言がある。程瑤田のもちいた「剛健婀娜」は蘇軾を意識したものであっても、格別に意味を持たせた言い回しではなく、ふつうに用いられた語彙と思われる。芸術において、方円・直曲・柔剛など相反する二面を挙げて説明するやりかたは常套である。

つぎに鄧石如には直接指導を受けていないが、その嫡伝の弟子と言われる呉熙載の評語を引用する。

……わたくし(呉熙載)が愚考するに、篆刻は老実であることが理想である。讓頭舒足が、望ましい。漢碑の文字表現を篆刻にとり入れたのは、鄧石如によって創始されたものである。このことから鄧石如の功績は不滅なのである(原文中国語・遠藤訳『趙撝叔印譜』呉熙載題跋) ……

同治二年(1863)、呉熙載六十五歳の評語である。讓頭舒足の典拠を見出せないが、呉熙載題跋にいう「讓頭舒足、爲多事」とは「老実」を説明したもので、壮年期の小乗の完成よりも晩年の大成をいうのであろう。呉熙載は、鄧石如の篆刻について、漢碑の筆意を印に取り入れたことを最大の特徴と指摘している。

さて、ここに日本で初めて鄧石如を本格的に取り上げて先駆をなし、画期的な論文を残した西川寧(1902-1989)氏を紹介しなくてはならないだろう。西川氏には、その著作集である『西川寧著作集』第三卷(二玄社)に九種の論考が掲載されている。しかし鄧石如の人物や書についての詳述はあるものの、鄧石如の印譜についての話柄を除いて、鄧石如の篆刻そのものについての言及はきわめて少ない。以下に、その短句を載せておく。

……印人として完白が清朝の印史に没すべからざる足跡を留め  
た事は今更嗚々を要せぬ(西川寧「完白山民が事ども」——山民の印譜——『書道』第五卷第八号 所収) ……

昭和十一年（1936）に発表された、西川氏三十五歳の文章である。呶々（ドウドウ）とは、口やかましく言うさまのことである。

そして篆刻家また古印研究者として近現代の印壇を代表する小林斗盦（1916-2007）氏の見解は、徽派と浙派を俯瞰し、当時の印壇の趨勢を端的に表現して、さらに鄧石如の存在意義について明確な示唆を与えている。

……周知のごとく、篆刻界は、明にはじまる徽派、乾隆にはじまる浙派に大別され、多くの名手を輩出したが、その両宗の志向するところは漢印復古にあった。それをいかに印面に表現するかにかかっていたのである。従って完白山人鄧石如の出現は、印壇にとって革命的であった。秦篆を現代に復活させた書業を直ちに印にとり入れ、生の筆意をそのまま鉄筆に移すことに成功した。書表現と刻技を直結させ、印の多様化の素地を拓いたのである（『呉讓之の芸術』―篆刻と印譜― 謙慎書道会『呉讓之の書画篆刻』二玄社 所収）……

昭和五十三年（1978）に発表された、小林氏六十三歳の文章である。

最後に、香港に在住した篆刻家であり研究者としても高名な馬国権（1931-2002）氏の見解を引用する。

……石如の印芸は絶えず発展進歩を遂げてきた。まずは、彼自

身の篆書による影響である。石如の篆書は、初期では李陽氷<sup>マ</sup>宗としたが、後に石鼓文・漢の碑額及び諸々の漢篆碑刻の体勢筆意を融合し、氣韻風采がともに横溢していた。そしてこの斬新な面貌をもって印の中に移入したのである。同時に用刀の方面においては、何雪漁の長切の法を衝刀に改め、かつ披刀を加えて補助とし、これによって線條は渾厚樸茂の感を増した。これは彼の同郷の先輩程邃の刻り方を参考にしたものである。惜しいことに、側款に年記を留めた作品があまりにも少ないので、石如の印芸の発展過程を順序づけることは甚だ難しい（『鄧石如の生涯とその篆刻芸術』『中国篆刻叢刊』第二十二卷 二玄社 所収）……

原文は中国語で書かれ、林宏作氏の邦訳である。昭和五十九年（1984）、馬氏五十四歳の論考である。文中の何雪漁は、何震（1522-1604）のことである。程邃（1605-1691）は明末の篆刻家である。

（補説―何震と程邃について）芸術しての篆刻は、文彭（1489-1573）に始まる。文彭は、蘇州に活躍した当代随一の文人である文徵明（1470-1559）の長男であった。文彭の弟子であり、のちに「文何」と並び称されて、篆刻家の尊敬を一身に集めたのが、明朝後期の嘉靖から万暦年間に活躍した何震（？-

1626頃)である。明朝末期、同じく安徽省出身の蘇宣(1553?・朱簡(1570頃?)・汪闞(1575?)・汪泓(生没年不詳)などの印人が活躍した。また程邃(1605-1691)などの後継者が出たことから、呉門<sup>①</sup>にとつてかわり、徽派(または皖派・新安派)<sup>②</sup>と呼ばれて篆刻界の主流になった。呉とは文彭の一門が活躍した蘇州の古称であり、徽・皖・新安は安徽省とその地域の古称である。

(補説―程邃の鄧石如への影響について) 本誌『大東書道研究』第一九号の小稿「鄧石如の篆刻における先人の影響」において、以下の鄧石如における摸刻印を指摘した。

- ・梁表印の摸刻は四件(「一日之跡」「折芳馨兮遺所思」「清素堂」「西湖漁隱」)
- ・甘暘印の摸刻は二件(「聊浮游以逍遙」「太羹玄酒」)
- ・丁敬印の摸刻は一件(「新篁補舊林」)
- ・呉澗印の摸刻は一件(「被明月兮佩寶璐駕青虬兮驂白螭」)
- ・何震印の摸刻は一件(「承學堂」)
- ・許谷印の摸刻は一件(「一肚不合時宜」)

ここに見るように、前述において馬氏が指摘する程邃の影響として鄧石如の摸刻の印例は確認できていない。

鄧石如の篆刻における奏刀のまとめ——これまで見てきた諸家の

鄧石如の篆刻における奏刀の見解を総攬すると、小林氏と馬氏の見解が明瞭を極めている。

小林氏は、秦篆を現代に復活させた書業を直ちに取り入れ、生の筆意をそのまま鉄筆に移したこと①、書表現と刻技を直結させ、印の多様化の素地を拓いたこと②の二点を指摘している。

馬氏は、用刀において何震の長切の法を衝刀に改め、これに披刀を加えて線條は渾厚樸茂の感を増したこと③、このことは同郷の先輩である程邃の刻法を参考にしたこと④の二点を指摘している。

## 8. 鄧石如の篆刻における印面拡大図版と専家の見解の検証

小林氏と馬氏の見解は四点に集約したが、④については、程邃の篆刻作品の印面がないことから比較検討することはできないので、ここでは省くことにする。

検討する見解は三点である、秦篆を現代に復活させた書業を直ちに印にとり入れ、生の筆意をそのまま鉄筆に移したこと①、書表現と刻技を直結させ、印の多様化の素地を拓いたこと②、用刀において何震の長切の法を衝刀に改め、これに披刀を加えて線條は渾厚樸茂の感を増したこと③である。

見解第一点、秦篆を現代に復活させた書業を直ちに印にとり入れ、

生の筆意をそのまま鉄筆に移したことは、(印面の拡大図版からみた特徴第三点)篆書の運筆と同様に、奏刀も行っていると考えられると指摘したこと一致する。また(特徴第二点)押刀と引刀の二種をもちいて刻していることも生の筆意をそのまま鉄筆に移すための奏刀の方法である。

見解第二点、書表現と刻技を直結させ、印の多様化の素地を拓いたことは、印面の拡大図版から指摘することは難しい。

見解第三点、用刀において何震の長切の法を衝刀に改め、これに披刀を加えて線條は渾厚樸茂の感を増したことは、(特徴第四点)とくに朱文印において、奏刀の途中で刀を入れなおすことなく一刀で進めている場合が見られることと、(特徴第二点)押刀と引刀の二種をもちいて刻していることが、その変遷を示している。

この指摘から判断すると朱文印「十分紅處便成灰」(図5)と朱文印「江流有聲斷岸千尺」(図6)は比較的早期のものであり、朱文印「古歡」(図1)白文印「子輿」(図2)・朱文印「一日之跡」(図3)・白文印「鍊硯山房圖書」(図4)は奏刀の変遷をへた後のものと考えられる。以上取り上げた印のなかで、刻年が判明しているのは朱文印「江流有聲斷岸千尺」だけで乾隆四十八年癸卯(1783)、鄧石如四十一歳の作である。ほかはすべて、刻年不詳の作である。

## 9. 結語

小稿で検討した、新資料である鄧石如の印材印面の拡大図版は、鄧石如篆刻の形成発展を確認するうえで、何よりの判断基準となること論じた。鄧石如の篆刻作品の印面拡大図版を集めて、その内容を検討し奏刀法から年代の変遷を論じて、鄧石如篆刻芸術の形成発展について検討を試みたものは従来にないもので、小稿が最初のものである。

ここで再び馬国権氏の指摘を思い起こしてみる。

……側款に年記を留めた作品があまりにも少ないので、石如の印芸の発展過程を順序づけることは甚だ難しい(鄧石如の生涯とその篆刻芸術)『中国篆刻叢刊』第二十二卷 二玄社 所収)……

という記述である。これに解決の糸口をさぐるのは、印面の拡大印影は何よりの手掛かりになることが期待される。印譜に載せられた印影からの判断には限界があることは、小林斗盞氏が『中国篆刻叢刊』第二十二巻の解説にあるとおりである。

今後の研究の展開としては、従来からよく知られた鄧石如の印譜にある印材が見いだされること、そしてその印面の刀痕こそが、あたらしい鄧石如の篆刻の形成発展を裏付けることになる。印面の拡

大印影が集められて、さらに多くの検討がなされることを期待したい。

今年、平成二十五年（2013）は、鄧石如生誕二百七十年記念の佳歳にあたる。わが国では、東京国立博物館と台東区立書道博物館の連携企画として『清時代の書—碑学派—鄧石如生誕二百七十年記念』が開催されて、鄧石如の業績が顕彰されている。思えば稿者（遠藤）が、鄧石如故居と墓所を中国安徽省安慶市郊五横郷に訪ねた平成二十年（2008）十月は、鄧石如生誕二百六十五年の佳歳であった。十月八日快晴、安慶市の菱湖公園内にある鄧石如碑館において、盛大に『紀念鄧石如誕辰二百六十五周年』開会の儀式が行われた記憶が昨日のことにように蘇る。小論が、鄧石如生誕二百七十年記念の佳歳にいささかの留念となれば幸いである。

なお、参考文献については、文中に明記したので重複を避けて再掲しない。

（平成二十五年十月三十一日稿）



「古歛」印影（拡大）の反転



図1 「古歛」印面（拡大）



「子輿」印影（拡大）の反転



図2 「子輿」印面の拡大





図3 「一日之跡」印面の拡大



「一日之跡」印影(拡大)の反転



図4 「鏡硯山房圖書」印面の拡大



「鏡硯山房圖書」印影（拡大の反転）



図5 「十分紅處便成灰」印面の拡大



「十分紅處便成灰」印影（拡大）の反転



「江流有聲斷岸千尺」印影（拡大）の反転



図6 「江流有聲斷岸千尺」印面の拡大



「本来面目」印影（拡大）の反転



図7 「本来面目」印面の拡大

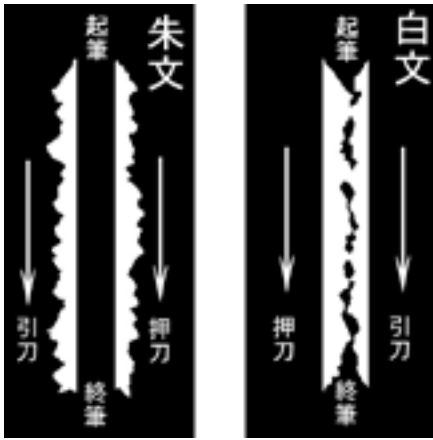


図9 鄧石如の奏刀法

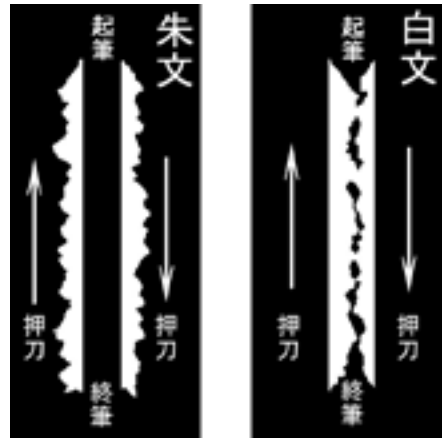


図8 松丸氏の解説による奏刀法

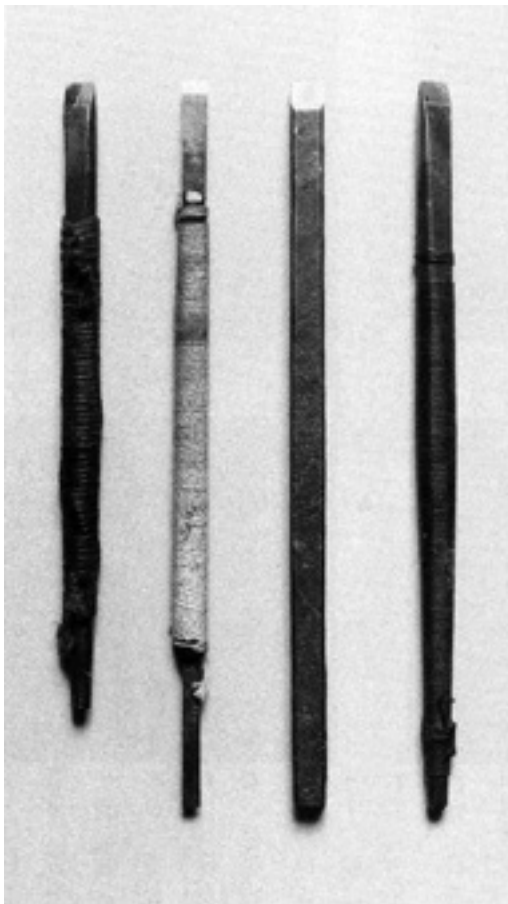


図11 小林斗盞『初学篆刻入門』より

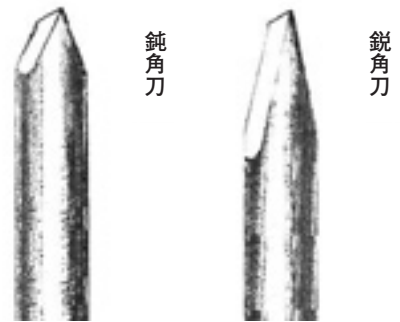


図10

